

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 33

カプリの青いトカゲ

堤 康徳

今年8月、およそ35年ぶりにカプリ島を訪れた。前回は、同行した友人の要望により、青の洞窟だけ見てナポリにとんぼ返りする急ぎ旅だった。いずれもう少しゆっくりと島を歩いてみたいという思いはかねてより抱いていたが、イタリア映画祭2019でも上映された、マリオ・マルトーネ(1959年ナポリ生まれ)の『カプリ島のレボリューション』を見たことが、カプリ再訪のひとつのきっかけになったのもかもしれない。

『カプリ島のレボリューション』(Capri-Revolution, 2018)は、リソルジメントを描く大作『われわれは信じていた』(Noi credevamo, 2010)、19世紀イタリアを代表する詩人ジャコモ・レオパルディの人生と創作の歩みをたどる『レオパルディ』(Il giovane favoloso, 2014)とともに、いわばマルトーネの歴史三部作を構成する。

映画の時代背景は、第一次世界大戦前夜のカプリ。北ヨーロッパの芸術家たちがこの島に共同体をつくり、原始的な生活を営みながら、絵画、音楽、舞踏といった創作活動を行っている。ヤギ飼いの島の娘ルチーアは、このコミュニティーにひそかに通い始め、リーダーの画家と惹かれ合う。彼女に裕福な年配の男との結婚をうながすふたりの兄、彼女に思いを寄せる社会主義者の医師がいずれも出兵するなか、ルチーアだけがあらゆる因習と決別し、ユートピアと自由を求めて未知の世界に船で旅立つ場面で映画は終わる。監督のマルトーネによれば、これは反逆する女の物語であるという。

本作は、20世紀初頭に、ドイツの画家カール・ディーフェンバッハが実際にこの島に作ったコミュニティから着想を得ている。ボヘミアンたちのユートピア的共同体は、映画にもあるとおり、文明社会に背を向けて、一夫一婦制を否定し、裸体主義と菜食主義を実践していた。カプリの何がディーフェンバッハを引きつけたのだろうか？ 夏の強い日差しを反射してきらめく、どこまでも青く穏やかな海と、海岸の荒々しい岩肌だろうか？ 冬は島じゅうにたちこめるレモンの香りだろうか？

カプリ島は大きく3つの地域に分かれる。港のあるマリーナ・グランデ。この港に、ナポリやソレントを結ぶ船が発着する。そして港からケーブルカー(funicolare)で数分の島の中心カプリ。そしてさらに上方に位置するアナカプリ(Anacapriのanaはギリシア語で「上に」の意)。8月のカプリ島はどこも観光客でごった返していた。とくにフニコラーレの停車駅 Piazzetta 周辺のカプリ中心街は、狭い通りに有名ブランドのブティックや飲食店が軒を連ね、人の流れが途絶えることがない。私が滞在した Hotel La Minerva は、島の南側斜面に立ち、はるかイオニア海を臨むすばらしい眺望に恵まれていた。経営者の三兄弟を始めスタッフの対応もすばらしかった。床はピカピカに磨きあげられ、廊下や客室には額に入った映画『軽蔑』のポスターが飾られていた。このホテルで映画が撮影されたわけではなく、監督や俳優の宿泊先でもなかったというが。

アナカプリのとある書店で、私は映画関連の 2 冊の本を偶然にも見つけ購入した。1 冊目は、Mario Martone, Ippolita di Majo, *Capri-Revolution*, Milano, La nave di Teseo, 2018. 『カプリ島のレボリューション』の脚本である。この本には、自作について語るマルトーネのインタビューも併録されており、映画製作の経緯や監督の意図を知るうえで参考になる。著者のひとり、イッポーリタ・ディ・マイオは、マルトーネの共同脚本家。もう1冊は、Sergio Lambiase, *Capri Movies. Sophia, Totò, B.B. & gli altri*, Napoli, Edizioni la Conchiglia, 2006. この本をひもとくと、トの喜劇から、クルツィオ・マラパルテの同名小説を原作とするリリアーナ・カヴァーニの『皮』(*La pelle*, 1981)まで、イタリア国内外の多彩な映画がこの島で撮影されてきたことがわかる。なかでもとりわけ名高い作品は、ジャン＝リュック・ゴダールの『軽蔑』(*Le Mépris*, 1963)ではないだろうか。主人公の夫婦を、ブリジット・バルドーとミシェル・ピコリが演じている。カプリ島東端の断崖絶壁に築かれたマラパルテ邸が主なロケ地である点も興味深い。

映画『軽蔑』の原作者は、アルベルト・モラヴィアである。モラヴィアの長篇小説『軽蔑』(*Il disprezzo*)は、1954 年に出版された。『軽蔑』の主人公リッカルドは、妻を喜ばせるために家を買うが、その費用を捻出するため、映画のシナリオを書く仕事を引き受けざるをえなくなる。だが新居の購入によっても、性の営みによっても、妻エミーリアとの心の隔たりを埋めることができない。彼は、妻がなぜ自分を軽蔑するのか理解できずにただただ狼狽し、苦悩を深めてゆく。『軽蔑』には、1960 年に発表された『倦怠』(*La noia*)と同じく、経済復興期にあるイタリアの知識人の孤独と倦怠が描かれている。

この作品はまた、映画をめぐる物語でもある。モラヴィアは、イタリア映画界に深くかかわった作家だった。数多くの映画の脚本だけでなく、およそ 2000 の映画評を書いている。また、モラヴィアの作品を原作とする映画は 30 本近い。このなかで、モラヴィア本人がとくに評価している映画のひとつが、ゴダールの『軽蔑』であるという。

リッカルドがプロデューサーのバットスタに依

頼されたのは、ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』を映画化するための脚本であった。バットスタによれば、ネオレアリズモの映画は、不健全で生きる勇気を与えず、憂鬱で悲観的であるがゆえに、人々に飽きられている。そこでドイツ人の映画監督ラインゴルトの提案を受け入れ、バットスタは『オデュッセイア』の映画化を企画する。世界で最も健全な書物ともいべき聖書を題材とする映画が成功を収めたように、ホメロスの叙事詩にもそれが期待できるというのである。そしてバットスタが『オデュッセイア』を映画化するにあたり何よりも望むのは、巨人と魔術師と怪物が跋扈し、嵐と奇蹟が起きるスペクタル性を前面に出す作品なのである。ところがじつは、ラインゴルトの関心は、『オデュッセイア』を夫婦間の不和の物語としてとらえることにある。ラインゴルトの構想において、イタカ島で夫オデュッセウスの帰りを待つ貞淑な妻ペネロペの物語は、妻のもとに帰るのを恐れ、無意識のうちにそれを先延ばしする男の物語へと反転する。ラインゴルトと対話を重ねながら、リッカルドは、家路を急ぐ夫と夫の帰りを待つ貞淑な妻こそが、自ら理想とする夫婦像に近いことに気づかされる。

バットスタは、脚本の執筆のために、カプリ島にある自らの別荘をリッカルド夫婦に提供する。カプリ島に着いたばかりの夫婦が、バットスタの別荘周辺を散歩する場面がある。作品中最も強い印象を残す一節といっても過言ではない。

ある曲がり角まで来ると、いきなりファラリオ一ニが目の前に現れた。エミーリアが驚きと感嘆の叫びをあげるのを聞き、私はうれしかった。彼女はカプリに来るのが初めてだったが、そのときまでずっと口を閉ざしたままだったのだ。はるか上から、ふたつの赤い巨岩が今にも海面に崩れ落ちそうだった。その奇妙な形は、空から鏡のうえに落下した隕石に似ていた。この光景に興奮した私は、ファラリオ一ニには世界のほかのどこにも見られないトカゲの一種が棲息しており、青い空と青い海のあいだに住んでいるがゆえに青くなったのだとエミーリアに言った。彼女はこの説明を興味深そうに聞いていた。まるで私への敵意を一瞬だけ忘れたかの

ように。そのため私は、和解の希望を再び抱かざるをえなかった。ふたつの巨岩にあるいくつかの隙間に巣を作ると私が説明したばかりのこの青いトカゲが、不意に私の頭のなかで、私たちが長くこの島に滞在すれば私たち自身になりうる姿の象徴となった。私たちの心もまた青くなるにちがいない。海辺の滞在の静けさによって、都会の憂鬱な物思いから生ずる煤がしだいに振り払われるだろうから。私たちの心も青く輝くことだろう。トカゲのように、海のように、空のように、そして、明るく陽気で純粋なものをすべてのように (Alberto Moravia, *Opere/3*, Tomo I, a cura di Simone Casini, Milano, Bompiani, 2004, pp. 963-964)。

ファラリオニ (Faraglioni) は、カプリ島南東沿岸にある岩礁群で、海から屹立する3つの巨岩から成る。そしてモラヴィアが言うように、この岩礁にしか棲息していない青いトカゲ (lucertola azzurra) が実在する (Wikipedia によれば、学名は *Podarcis siculus coeruleus*)。青いトカゲは、リッカルドにとって、幸福の青い鳥だったのであろうか。そこにいつまでも暮らせば、誰もが心を洗われ、青く澄み切った魂を手に入れることができる。たしかにそう感じられるほど、カプリの海と空はどこまでも青い。若山牧水が短歌に詠んだように「空の青海のあをにも染まずただよふ」白鳥 (しらとり) はかなしい。それとは対照的に空と海の青に染まった、世界でたった一箇所の岩山にしか棲息しないというトカゲもまた、どこかかなしい。

トラガーラ岬 (Punta Tragara) からファラリオニのすぐそばまで、300メートルほどの散歩道が整備されている。朝早く、私はこの急な傾斜の散歩道を降り、岩礁群を目の前にのぞむ場所まで行ってみた。ファラリオニは、岸から難なく泳いで渡れるほどの距離にあった。散歩道を降りる途中、脇の斜面をカサコンと音を立ててすばやく通り過ぎた生き物がいた。青いトカゲだ！ と一瞬思った。だがそこにいるはずもない。それは、うす茶色の野ウサギだった。2匹いる。つがいだろうか？



【イタリア映画祭 2019 のカタログ (左) と『カプリ島のレボリューション』の脚本】

モラヴィアは、1941年に結婚することになる作家のエルサ・モランテとともに、1930年代の終わりからたびたびカプリを訪れている。1940年夏、ふたりはアナカプリのチェゼッレ邸 (Villa Ceselle) に2部屋を借りて逗留した。42年8月、モラヴィアはここで小説『アゴスティアーノ』を執筆している。翌年9月、連合軍との休戦協定が発表されると、ふたりはドイツ占領下のローマを脱出し、チョチャリア地方の僻村で8ヶ月を過ごしたが、戦後は再びカプリに戻った。1947年晩春から8ヶ月間、やはりチェゼッレ邸に滞在しながら、モラヴィアは新聞各紙に精力的に寄稿した。モラヴィアにとってカプリ島は、何よりも周囲の喧騒から離れ、仕事に集中できる環境だったにちがいない。

カプリを舞台とする小説は『軽蔑』のほか、死と官能の気配の濃厚な『1934年』(1934, 1982)がある。

エルサ・モランテは1957年、ナポリ湾に浮かぶプローチダ島を舞台にした小説『アルトゥーロの島』(*Lisola di Arturo*)を発表した。

<参考文献>

アルベルト・モラヴィア『軽蔑』(大久保昭男訳、角川書店、1980年)

アルベルト・モラヴィア『1934年』(千種堅訳、早川書房、1985年)

エルサ・モランテ『アルトゥーロの島』(中山エツコ訳、河出書房新社、2009年)

(上智大学准教授)

『銀幕の中のベルルスコーニ』

二宮 大輔

醜聞まみれの元首相シルヴィオ・ベルルスコーニは実業家であり、政治家であるとともに、俳優でもあった。そんな物言いをしたら誤解を招くが、それほどまでに、彼を題材にした映画が数多く撮られている。良くも悪くも彼は映画を制作する上で多大なインスピレーションを感じさせる特異な人物であり、それは現在も変わっていない。銀幕に映し出される彼の姿は、滑稽なピエロ、禍々しいヒール、ときには威風堂々とした偉人のようでもある。何役もこなすミステリアスなスター。それが銀幕の中のベルルスコーニだ。



【シルヴィオ・ベルルスコーニ】

出典元: https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Silvio_Berlusconi_Portrait.jpg

年代順に進めていくと、2004年のダヴィデ・フェラーリオ監督『トリノ、24時からの恋人たち』(*Dopo mezzanotte*)。映画博物館でもあるトリノの尖塔モーレ・アントネリアーナで警備員をする奥手な主人公マルティーノ、その近所のファーストフード店で働くアマンダ、その彼氏でワイルドなバイク乗りのアンジェロによる三角関係の恋物語だ。最後には仲睦まじいマルティーノとアマンダのために身を引くアンジェロだが、バイクで走り去る際に、警備員を挑発したため、わき腹を銃で撃たれてしまう。バイクを止め、タバコで一服しながらも多量の出血のため道端にうずくまるアンジェロ。いまわの際で彼

が目にしたのは、にっこりほほ笑むベルルスコーニの顔写真が大々的に貼られた選挙カーだった。最愛の彼女を失い、奇妙な巡り合わせで銃弾の餌食になってしまったアンジェロに対し、追い打ちをかけるように、嫌われ者の首相の顔が眼前に現れるという皮肉に満ちた場面だ。私は数年前にこの場面を発見して「ああ、このころからベルルスコーニは映画に出演していたのだな」と妙に感じってしまった。彼の政界入りが1990年代前半だったことを考えると当然なのだが、この映画が公開された2004年の時点ですでに、ベルルスコーニは映画を皮肉なユーモアで味付けする調味料の役割を果たしていたのだ。

次は2006年、ちょうど中道左派連合に総選挙で敗北して第二次ベルルスコーニ政権が終焉を迎えたころ、ナンニ・モレッティ監督が『夫婦の危機』(*Il caimano*)を発表している。往年のB級映画プロデューサーとして一世を風靡したブルーノだったが、現在は元女優である妻との関係も行き詰まり、自らの映画制作会社も倒産寸前だ。そんな最中、新人監督テレザが持ち込んだ“*Il caimano*”(カイマンワニ)というタイトルの脚本を、一か八か社運をかけて受け入れる。ところがよく話を聞いてみると、映画の内容はベルルスコーニがどのように首相まで上りつめたかを描く当時の政権を辛辣に批判するものだった。仕事もプライベートも悪化の一途をたどるなか、ブルーノはテレザとともに“*Il caimano*”のラストシーンの撮影に踏み切る。劇中の“*Il caimano*”だけでなく『夫婦の危機』のラストシーンでもあるこの場面で、監督モレッティ自身が演じるベルルスコーニは、汚職で七年の禁固刑に処された後、集まった記者たちの前で司法の横暴を糾弾し、大胆不敵に裁判所を後にする。作中では、ブルーノとテレザが、周りから様々な忠告を受けつつも、ベルルスコーニ批判の映画を撮ろうと四苦八苦する。つまりこの作品は、単純に彼を批判しているわけではなく、物語の中に首相批判の物語があり、それに対して人々がどのように考え、反応しているかを俯瞰するという二重構造になっている。モレッティ自身も「ベルルスコーニについてではなく、彼の登場によっていかにイタリアが変わってしまったかを描きたかった」と述べている。

2009年、ベルルスコーニが首相に返り咲いて約一年経ったころ、イタリア中部ラクイラでマグニチュード6.3の大地震が起き、300人を超える犠牲者が出た。翌2010年、ジャーナリストを父に持つコメディ女優サビーナ・グツァンティがこの震災をテーマにした『ドラクイラ』(*Draquila*)というドキュメンタリー映画を発表している。ドキュメンタリーの中でグツァンティは、ベルルスコーニが自らのイメージ回復パフォーマンスのために、自然災害に緊急対応するための市民保護局と結託して、ラクイラの被災者を利用したと指摘している。国家組織の私物化、国民を巧みに利用して私欲に走るその手法は、彼の政治活動において一貫しているというのが、グツァンティの意見だ。タイトルは被災地ラクイラとドラキュラを掛け合わせたもの。つまり、ベルルスコーニはさしずめ被災者の生き血を吸うドラキュラというわけだ。本作は震災から13か月後のラクイラで初上映され、カンヌ国際映画祭でも出席していた文化相が映画鑑賞をボイコットするなど、大変話題になった。それにしても、2010年にいたっては、なんとベルルスコーニが吸血鬼にまでなってしまった。



【『LORO 欲望のイタリア』より】

©2018 INDIGO FILM PATHÉ FILMS FRANCE 2 CINÉMA

このように、それぞれの時代ごとに、ベルルスコーニはさまざまな形の悪役として銀幕に投影されてきた。ゆえに、去る11月15日に日本公開が始まったパオロ・ソレンティーノ監督『LORO(ローロ)欲望のイタリア』(*Loro*)には違和感を覚えずにはいられない。なぜ今ベルルスコーニなのか。この作品が“Loro1”と“Loro2”の、計200分を超える2本の映画としてイタリアで公開されたのは2018年の春

のこと。ベルルスコーニが首相の座から引きずり降ろされてから7年も経っている。さらに日本では一年半遅れで公開となったため、余計に違和感を覚えてしまう。83歳になる彼は、今も欧州議会議員に選ばれるなど、現役の政治家ではあるのだが、それでもピークが過ぎ去った感は否めない。悪役になりそうな新手的政治家だって他にもたくさんいる。自分なりになぜこのタイミングでソレンティーノが『LORO』を撮ったのか考えてみた。

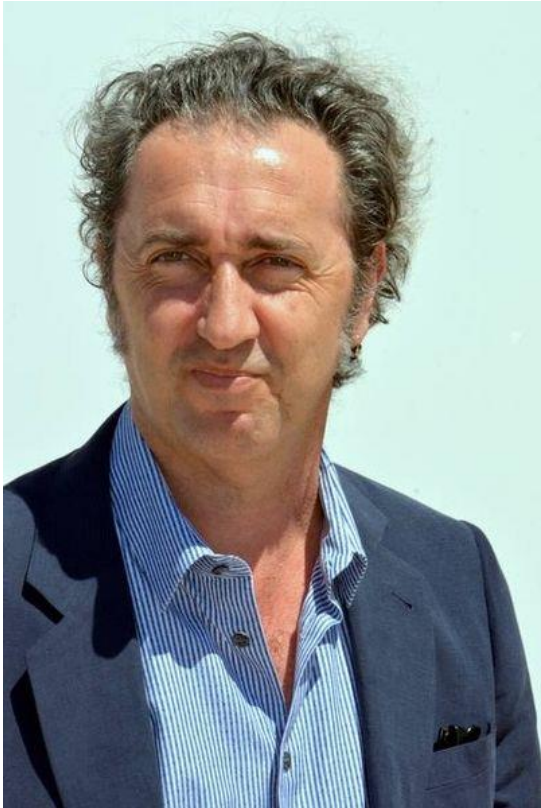


【『LORO 欲望のイタリア』より】

©2018 INDIGO FILM PATHÉ FILMS FRANCE 2 CINÉMA

前々作『グレート・ビューティー／追憶のローマ』(*La grande bellezza*)でアカデミー賞外国映画賞を獲得したソレンティーノ映画の特徴は、仰々しい半狂乱の宴や、格式高いクールなパーティーと、そこにいる主人公が内に抱える孤独や厭世を対比させ、美しい画でそれを表現すること。その意味で本作も遺憾なくソレンティーノの持ち味が発揮されている。物語はちょうどベルルスコーニが政権を失った2006年から始まる。政界で名を挙げるといふ野心を抱く青年実業家セルジョが、若い女性たちを集めてパーティーを企画し、はるか遠い存在の「彼」に取り入ろうとする。「彼」ことベルルスコーニは、セルジョを気に入り、夜は彼が斡旋する若い女性たちを侍らせ、日中は政権奪取の根回しに邁進する。全能の神であるかのように、思いどおりに首相に返り咲いたベルルスコーニだったが、未成年のモデルとのスキャンダルが明るみになり、妻であるヴェロニカから離婚の申し出を突きつけられ、彼女と激しい口ゲンカをしてしまう。ここで気づかなければならないのは、作中でソレンティーノがベルルスコーニの政治的動向やスキャンダルをつ

ぶさに追って彼を批判しているのではなく、政治家という殻を取り払い、人間としての彼を凝視しているということだ。



【パオロ・ソレンティーノ監督】

出典元: https://zh.wikipedia.org/wiki/File:Paolo_Sorrentino_Cannes_2017.jpg

実は同じような試みなら2008年の同監督『イル・ディーヴォ 魔王と呼ばれた男』(Il divo)でも行われていた。70年代から90年代にかけて三度首相に君臨したイタリアを代表する中道右派の政治家ジュリオ・アンドレオッティが、大統領に立候補するも落選、さらにマフィアとの癒着と汚職事件で失脚し、裁判にかけられるまでを描いた作品だ。彼はベルルスコーニと同じく幾度となく裁判沙汰になり悪役扱いされてきた政治家だが、その性格は真逆で、冷静沈着で、目立つことを常に避けてきた。作中、何が起ころうとも動じないアンドレオッティだが、彼が徐々に没落していくその横には妻リヴィアの姿があった。テレビから流れるレナート・ゼロのバラード“I migliori anni della nostra vita”(私たちの人生最良の年月)を聞きながら、リヴィアが慰め

るようにアンドレオッティの手をそっと握る。妻の支えがあってこそ、アンドレオッティは記者や判事からの厳しい攻撃にも耐えて、2000年代まで続いた複数の裁判で無罪を勝ち取る。驚くことに、半ば仮装するように二人を演じているのは、どちらもベテラン俳優トニ・セルヴィッロだということにも留意したい。このように、『イル・ディーヴォ』でも『LORO』と同じく、他者を戦慄させるほど強大な力を持った政治家が、妻を愛しく思う姿が描かれていた。

『LORO』を通して伝えたいのは、ベルルスコーニの人間性ではなく、欲望を餌に人間を操る資本主義への痛烈な批判であるという評価も散見するが、個人的には逆だと思っている。上述二作に共通する妻への愛を考えると、ソレンティーノが本当に描きたかったのは、欲望まみれの退廃的な宴の果てにも一握の人間らしさが残っている世界だと思えてならない。政治的批判や現代性からは離れたところで、ベルルスコーニとアンドレオッティという対極をなすイタリアの二大政治家のなかに、ソレンティーノは人間らしさを見出す夢をみたのだ。

(翻訳家・当館元受講生)

『LORO 欲望のイタリア』

11/15 よりシネ・リーブル梅田、京都シネマほか全国ロードショー

監督: パオロ・ソレンティーノ

出演: トニ・セルヴィッロ、エレナ・ソフィア・リッチ、リッカルド・スカマルチョ

2018年 / イタリア / イタリア語 / 157分 / カラー / シネスコ

原題: Loro / 英題: Them / 日本語字幕: 岡本太郎 / 配給: トランスフォーマー

R15+

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>